

日本の風景は変わった～原発電気不買運動の紹介～

3.11 フクシマ事故を契機に、多くの市民が路上に出て、声をあげるようになった。たしかにかつてのような勢いはない。しかし、確実に根付いており、安倍自公政権に「対峙」している。

もう一つ、大きく変わったのが、都市や村落の風景である。

自動車や電車に乗って窓外の風景を眺めていると、一戸建ての屋根や工場・倉庫などの屋根上に設置されている太陽光パネルが、至るところで光輝いている。田舎の大きな空き地や田畑にも、太陽光パネルが林立。乱開発の危惧はあるが、その数たるや、はかりしれない。

そして、3年前の夏に訪れた東北・日本海側の海岸線には、風力発電の風車が延々と続いていた。

温泉大国日本ならでの地熱発電も試みられている。

森林の間伐材を利用してのバイオマス発電を試みている地域も増えている。

「環境破壊」にならないよう、細心の注意が払われているかといえば、もうけ第一主義からの事業もあって課題は多いが、3.11 を契機に日本の風景は確実に変わった。

変わっていないのは、安倍自公政権、経産省、電力会社、原子力学会など、かつて「原子カムラ」と呼ばれた勢力であり、虎視眈々と復活・支配を画策している。それが、原発の再稼働の動きであり、東京五輪の開催にあわせるかのように進められている「福島への帰還政策」「原発事故による諸被害を、“風評”被害と称して過小評価し、無きものにしようとする動き」であろうか。

日常に追われる庶民は、声を荒げることは少ない。

しかし、原発事故の被害は、私たちの記憶に焼き付けられている。日本の風景が変わったのは、人々の意識の根底部分で何かが変わったからであろう。原発による電気を嫌い再生可能エネルギーへのシフトを図ろうとする、爆発的な変化は起きてはいないが徐々に変化していく、いかにも「日本らしい」変容であろう。

2016年からは、個人の家庭でも、電気の購入先を選択し、大電力会社から新電力に変えることが可能となった。

2018年の今年、9月初めの台風21号による関西大停電、北海道胆振東部地震を契機とする北電のブラックアウトなど、災害による停電時に、太陽光発電などの自家発電が様々な形で効果をあげたことが話題になった。

来年の2019年には、固定価格買取制度が始まった2009年より10年経過したことで、大電力会社による買取価格が下がることが予想される「2019年問題」が控えている。対象となる家庭は50万戸におよぶそうだ。そして、この問題はこれから毎年続く。

2020年には、大電力会社に、送配電部門の別法人化が求められる。大電力会社による地域独占をさせないための改革であるが、「原子カムラ」はその空洞化を図ろうと手抜きの法

人をつくることだろう。

市民と「原子カムラ」の攻防は続いている。

そして、現在、原発の再稼働が相次ぎ、司法の現場でも市民側に苦渋を与える判決が相次ぐなか、安倍・自公政権を変えることも大切だが、日常的にできる戦い方があるのにお気づきだろうか？ それが、「原発電気不買運動」である。

2016年より、私たちはどの会社から電気を購入するのか、選択できるようになった。添付の文書（注1）にあるように、電話1本でお手軽にできる。首都圏・関西圏に比べ、ここ九州圏の場合、選択肢は少ないかもしれないが、下記のリンク先（注2）で、電気構成などを調べることができる。電力会社を変えることは、電話1本で可能である。まず、各自の家庭から。そして、引越をする友人・知り合いがいれば、この機会に変更してはどうかと勧める等々、運動の広がりも可能であろう。

（注1） 原発電気不買運動の呼びかけ <https://byenukes-saga.blog.so-net.ne.jp/>

（注2） パワーシフト power-shift.org/

電力比較サイトエネチャージ <https://enechange.jp/try/input?f=header-menu>

最後に、実は日本の風景を変えた太陽光パネルなどを設置した戸建てでは、諸問題にぶつかっている。「2019年問題」とは別に、こんな問題もある。

当方の自宅も、2011年事故の数ヶ月後、2階屋根上にパネルを設置した。発電した電気を自宅で消費し、余った電気を売り、不足分は購入している。設置から丸7年、自宅電気の42%を自家発電でまかなってきた。ところが、当時も、そして今も、まだまだ蓄電池は高価で、未設置である。そうすると、ここ福岡市では大電力会社にしか売れないのである。売電と買電を別会社にするのは、できない。蓄電池をつければ、九電との関係を絶って解決できるのだけど悩んでいる。設置してから丸7年、充分元は取った。蓄電池のカタログを広げる日々が続いている。

ちなみに、家庭用蓄電池は、メーカーにもよるのかもしれないが4.2kWhから。電気自動車で知られる日産リーフは駆動用バッテリー容量が40kWhとのこと。電気自動車が普及し蓄電池の技術が格段に進めば、価格も下落するであろう。そうすると、また風景は変わってきそうである。

世界の趨勢は、安価な太陽光・風力などに移行している（注3）。電気自動車の普及とも相まって、変化は加速されるだろう。期待が膨らむ。

（注3） 日本経済新聞 2018年9月27日・配信記事

「太陽光と風力が最安」原子力の専門家が報告書

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO35826940X20C18A9000000/>

2018年10月8日公開（文責・片山純子）